

分担研究：居住環境と子どもの健康に関する研究

総括研究報告

松田一郎

要約：(1) 低層階居住の妊婦に比べて、高層階居住の妊婦に高率にみられる流・死産の原因探索目的で妊婦の喫煙、飲酒習慣について調査したが、いずれもその要因にはならなかった。(2) 高層階居住の母子関係は低層階居住のそれよりも強く、児の自立を妨げているかにみえたが、改善の方向にある。(3) 父母受動喫煙の影響として児の呼吸器疾患罹患率、問題行動を示す率いずれも有意に高かったが、後者については母親の性格も関与している成績を得た。(4) 小学生の場合の理想的通学時間は60分で、それを越すと不定愁訴量が増加する。

見出し語：居住環境、妊娠・分娩、受動喫煙、通学距離

I. はじめに

居住環境が子どもの健康におよぼす影響を知る目的で3つのリサーチクエッションについて検討した。(1) 高層居住の妊婦、子どもの健康状態は低層住居のそれらと差があるか、(2) 家庭の喫煙と子どもの健康の間にはどのような関連性があるか、(3) 通学時間・通学手段と児の健康状態の関係はどうか。

II. 研究方法

各研究協力者はアンケート用紙を用いたサーベイを行った。

III. 結果及び考察

1. 居住環境が妊婦に及ぼす影響 (逢坂)

横浜市保土ヶ谷区、港南区および戸塚区の各保健所に4ヶ月健診に来た、第1子のみ分娩した母親を対象にしてアンケート調査を行った。検査項目は妊娠前後の喫煙・飲酒習慣、配偶者の喫煙・飲酒習慣、居住形態、分娩状態(正常、流・死産、人工中絶)などである。

前回と同様、このアンケート調査でも高層階居住の妊婦では流・死産の割合が低層階居住の妊婦より高かった。各層階居住の妊婦については喫煙・飲酒習慣の割合を調べてみたが、傾向としては、高層階居住の女性の方が、妊娠前喫煙していた割

合は少なく、飲酒習慣は高い割合を示したが、推計的には各群間での有意差はなかった。妊娠確認後、喫煙は約60%、飲酒は約80%止めていることが判明した。

2. 構想住宅居住に伴う母子関係の変化（織田）

兵庫県芦屋と東京都江戸川の2ヶ所の住民を対象にしてアンケート調査を行い、主として住居環境に対する母親の満足度、1～6歳の子どもの自主性について調査した。

高層住宅居住の母親の住宅環境に対する満足度は低層住宅居住の母親よりも高いことが判明した。しかし、一方で高層のため外出が不便、エレベータ内での事故が心配などの不安も抱えている。7年前に東京の同じ地区で行った調査では、高層階居住の母子は外出回数の少ないこともあって、より強い母子関係が成立し、子どもの自立性が遅れがちになるという問題が指摘されたが、今回の調査ではその事実は消失していた。兵庫県での調査ではまだこの事実は確認されていることもあり、恐らくこれまでいくつかのメディアを通じて住民への啓蒙活動を行って来た結果と思われる。

3. 母親及び家族の喫煙が子どもの健康に及ぼす影響（永田）

熊本・北海道5地域の小児科外来を訪れた母子、さらに熊本市内19ヶ所の保育園児を対象としてアンケート調査を行った。内容は、出生体重、乳児栄養、家族の喫煙、子どもの健康状態、子どもの問題行動（3歳）、についてである。保育園児については母親・保母にそれぞれブラインドで独立して記載してもらった。母親の性格調査も一緒

に行った。

妊娠前に喫煙していた女性（21.1%）の約半数が妊娠後止めているが、このうちの約50%が出産後喫煙を再開していた。喫煙している母親の性格では有意に外向得点、神経質得点が高いことが判明した。受動喫煙の子どもでは、呼吸器疾患に罹患する傾向があり（ $p < 0.05$ ）、また「集団中での悪行」、「運動傾向」、「おどしたり暴力をふるう」、「気性が激しい」などの問題行動が非受動喫煙の子どもより高率に見られた。「ひとの行動を妨害する」の問題行動は母親の性格と強く関連することが判った。

4. 通学時間・手段が子どもの健康に及ぼす影響（近藤）

首都圏の国立（2校）、私立（1校）、公立（4校）の計7校の5年生を対象にして、主に生活時間の配分（通学時間を含む）、健康状況について調査した。

国立・私立の生徒は受験して入学した者で、生活時間をみると、朝早く起床し、睡眠時間・遊びの時間が短い、つまりこうして得た「時間」を通学時間・塾などで使っていた。

全体を通じて通学時間に60分以上を要する学童はそれ以下を要する学童よりも「頭が重い」、「からだがだるい」、「ねむい」、「目が疲れる」、「肩こり」などの不定愁訴（量）を訴える割合が多い。

一方、60分以内の通学時間の学童では、通学に時間がかかる者の方が不定愁訴（量）は少ないことが判明した。

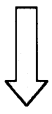
IV. 研究結果の活用方法と今後の課題

織田の報告にみられたようにメディアを用いての啓蒙が効果的であったとする結果はわれわれに1つの望みを与えてくれる。現在の居住環境にはかなり不可避の部分があり、われわれはそれにどれだけよく適応していくかである。喫煙については、特に若い女性にその不利益な点をアピールしていきたいと思う。

妊娠確認後、妊婦の喫煙・飲酒が減少しているのは喜ばしい、残念ながら夫はこのことにあまり協力的ではないようである。

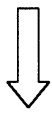
学童はわれわれが考えているより以上に現在の環境に適応しているように見える。しかし、やはり独り独りが問題を抱えているわけで、「学業中心」から「学校生活中心」へと生活の質を変えてやるべきだと思う。

短い調査期間であったが、居住環境の変化が人々の生活習慣・健康に様々に影響しているのが解った。但し、この環境変化は不可避でもあり、どうadaptationするかが問題であろう。もしも、危険な状況という結果がでるならば、それについての警告が必要かもしれない。今後は、adaptationしている人々について、その要因を探り、idealなライフスタイルについて具体的な方法を探り、(例えば高層階居住の妊婦の体重増加率を下げるようにモニターする)、啓蒙普及させる手段を考えるべきと思われる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：(1)低層階居住の妊婦に比べて、高層階居住の妊婦に同率にみられる流・死産の原因探索目的で妊婦の喫煙,飲酒習慣について調査したが、いずれもその要因にはならなかった。(2)高層階居住の母子関係は低層階居住のそれよりも強く、児の自立を妨げているかにみえたが、改善の方向にある。(3)父母受動喫煙の影響として児の呼吸器疾患罹患率,問題行動を示す率いずれも有意に高かったが、後者については母親の性格も関与している成績を得た。(4)小学生の場合の理想的通学時間は60分で、それを越すと不定愁訴量が増加する。